

先進繡像玉石雜誌

仁

正藪六

一六〇	二二	三九	二四	和書門
冊	架	函	號	類

五	六	和書
函	冊	類
架	冊	號

内閣文庫	
番號	和 16024
冊數	20 ( 6 )
函號	158 211

史傳載紀十七

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM, Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

柳菴栗原氏編

第二帙

先進  
繡像

玉石雜誌 正編

東都書林

尚友堂發兌



玉石雜誌序

淺草文庫



友人栗原君伯任後書好古最精本  
邦典故又喜名人肖像其秘於神祠  
佛宇者百方探索不遠千里必往觀  
之親輒摹榻焉積年之久得凡七百  
餘人自王公貴權以至緇侶工商婦  
女皆靡不有也頃者摘著元弘以降  
數人將鏤之梓又舉其事實可據者

以係小傳。或摹其筆跡。或圖其居室。器什及戰處游蹟。以附之。而不擇其賢不也。乃命曰玉石雜誌。謁余序。展而觀之。古人顏容宛然在目。又讀其傳。足以畧知其言行心志。乃使我得交數百年前之人於一室中矣。夫交也者。昉於識顏容。而極於知心志。其於古人。則宜就史傳以求之。史傳能

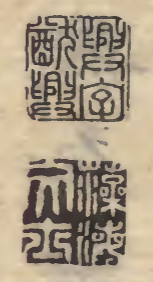
(序一)

記其言行。而心志亦可知也。獨其於顏容。則不能髣髴焉。是史傳之所以有憾也。今伯任之著。以傳其容。為主。此則亦足以補史傳之闕矣。或謂此編不擇賢不。殆亦徒為無益。余謂不然。覽者於其賢者。效而則之。於其不賢者。鑑而自警。則不賢者亦未必無益焉。詩云。他山之石。可以攻玉。此

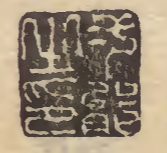
之謂也。夫如此則他任之志伸矣。乃書以為序。

天保十四年星次癸卯六月中漸

藻海川田與撰



綵雲紀能書



序二

先進繡像玉石雜誌卷第六目錄

北條相模守平高時朝長肖像并傳

御後見 加合判 將軍家政所別當

督總領 吉書始

邦良親王 乘基法印 并真蹟三部華嚴經跋

常盤駿河守範貞 鬪天畫 田樂

刑部少輔仲範 二階堂貞藤入道道益

北條左近將監泰家 金澤修理大夫貞顯 全實時

清原教隆 太田勘解由判官康育 後教壹岐守

藤之品茂範 無外如大尼 金澤顯時 藏書印

鎌倉古圖

竹御所圖

寶戒寺

貫高

德崇推現神影

實戒寺安置

信亮敬寫



六ノ日

北條相摸守平高時肖像

實戒寺安置



北條相模守平高時朝臣ハ相模守貞時乃嫡男不<sup>レ</sup>母  
ハ秋田城介義景乃二男大寶三郎景村の長男太郎左衛  
門尉泰宗乃女たり貞時の母潮青院尼嘉元元年癸卯乃  
歳鎌倉小町の家<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>其頃父貞時ハ執権を相模守師  
時<sup>ニ</sup>讓<sup>リ</sup>我<sup>ガ</sup>身<sup>ヲ</sup>出家<sup>ス</sup>最勝園寺入道宗瑞と稱<sup>シ</sup>一  
ハ禪師入道毎<sup>ニ</sup>相者<sup>ノ</sup>綿密<sup>ニ</sup>乃<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>暇<sup>ヲ</sup>ハ天下<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>政  
理<sup>ヲ</sup>大事<sup>ニ</sup>子思<sup>ヒ</sup>終<sup>ニ</sup>け<sup>テ</sup>了<sup>ル</sup>約年<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>歳<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>レ</sup>り<sup>ニ</sup>  
男<sup>子</sup>を儲<sup>ケ</sup>け<sup>テ</sup>ハ成<sup>レ</sup>壽丸<sup>ト</sup>名<sup>付</sup>て<sup>レ</sup>掌<sup>中</sup>乃<sup>レ</sup>珠<sup>ノ</sup>一<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>  
鍾<sup>愛</sup>せ<sup>テ</sup>ら<sup>レ</sup>生<sup>長</sup>乃<sup>レ</sup>程<sup>を</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>テ</sup>の<sup>ニ</sup>待<sup>色</sup>け<sup>テ</sup>了<sup>ル</sup>應<sup>長</sup>元  
年十月廿六日貞時入道<sup>ニ</sup>十一<sup>ニ</sup>歳<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>世<sup>を</sup>早<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>時  
成<sup>レ</sup>壽丸<sup>ト</sup>乃<sup>レ</sup>九<sup>ニ</sup>歳<sup>ニ</sup>たり<sup>ニ</sup>後<sup>を</sup>内<sup>管</sup>領<sup>長</sup>法<sup>入</sup>道<sup>園</sup>在<sup>ス</sup>

と秋田城介時顯と心を合<sup>テ</sup>貞時入道乃遺<sup>云</sup>あり<sup>と</sup>  
幼<sup>稚</sup>乃<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>壽丸<sup>を</sup>以<sup>テ</sup>執<sup>権</sup>ふた<sup>と</sup>武<sup>藏</sup>守<sup>泰</sup>時<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>來<sup>ル</sup>  
嫡<sup>子</sup>相<sup>傳</sup>乃<sup>レ</sup>家<sup>督</sup>を<sup>レ</sup>継<sup>ぎ</sup>と<sup>シ</sup>外<sup>ニ</sup>志<sup>信</sup>を<sup>レ</sup>專<sup>ム</sup>と<sup>シ</sup>云<sup>ハ</sup>共  
内<sup>ニ</sup>乃<sup>レ</sup>面<sup>々</sup>の<sup>レ</sup>私<sup>欲</sup>成<sup>レ</sup>逞<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>か<sup>と</sup>ん<sup>ニ</sup>乃<sup>レ</sup>為<sup>リ</sup>あり<sup>と</sup>ハ知<sup>人</sup>文  
子<sup>か</sup>う<sup>り</sup>け<sup>レ</sup>と

治承四年北條<sup>ハ</sup>郎<sup>時</sup>政<sup>前</sup>在<sup>兵</sup>衛<sup>洗</sup>賴<sup>朝</sup>卿<sup>乃</sup>義<sup>兵</sup>を  
揚<sup>め</sup>乃<sup>レ</sup>馳<sup>加</sup>乃<sup>レ</sup>武<sup>威</sup>を<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>驕<sup>奢</sup>を<sup>レ</sup>志<sup>ス</sup>乃<sup>レ</sup>節<sup>儉</sup>  
と<sup>シ</sup>主<sup>と</sup>々<sup>々</sup>朝<sup>憲</sup>を<sup>レ</sup>奔<sup>走</sup>せ<sup>テ</sup>乃<sup>レ</sup>里<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>海<sup>を</sup>  
指<sup>揮</sup>乃<sup>レ</sup>靡<sup>々</sup>乃<sup>レ</sup>民<sup>を</sup>乃<sup>レ</sup>業<sup>を</sup>を<sup>レ</sup>樂<sup>シ</sup>乃<sup>レ</sup>君<sup>と</sup>臣<sup>と</sup>水<sup>と</sup>舟<sup>と</sup>  
乃<sup>レ</sup>心<sup>を</sup>一<sup>ハ</sup>乃<sup>レ</sup>太平<sup>の</sup>風<sup>化</sup>を<sup>レ</sup>致<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>乃<sup>レ</sup>其<sup>の</sup>  
身<sup>五</sup>位<sup>乃</sup>受<sup>領</sup>乃<sup>レ</sup>過<sup>シ</sup>乃<sup>レ</sup>嫡<sup>子</sup>義<sup>時</sup>出<sup>ハ</sup>續<sup>ク</sup>將<sup>軍</sup>家<sup>を</sup>補<sup>ハ</sup>

先一承久乃擾亂を鎮め、（一）其後々々乃勢ハ漸ク強  
大ニあり、潜上掠奪の色を立し、（二）嫡子武藏守泰時又  
くあをを匡救し、之海内無為乃政を仰ぎ身口不乃上  
階ふまじく之廿年天下乃執権を全くと義時卒して後  
泰時之乃遺跡を相續まとい、（三）魚と也世質恭儉ふし  
天下を私さ以叔父相摸守時房泰時ふ長まを奉て  
加判さむ、（四）將軍執権次第了泰時父の譲了まらさ御  
へき世の御をうけあせより後々例とく御後見と加  
合判とあ、（五）以二人、將軍家政所別當たりし  
あり、（六）東濫建久二年八月八日將軍家政所始ありし  
刑業令ハ民部少丞兼東宮政業主ハ後井後長秋事  
ハ中原光家とあり、（七）其後文曆二年康島朝秀了賜たか

御下父了將軍家政所下平朝發、（一）別當相摸守平朝  
長判武藏守平朝長判とあり、（二）時房泰時乃二人あり、（三）別  
別當と稱さし、（四）實の職各ふくあり、（五）又ハ御後  
見と也稱、（六）泰時ま、（七）弟乃朝時重時政村等、（八）以罪量子  
任さく、（九）別當合判を讓補さむ、（十）志よりは  
嫡流ハ此ハ別當を私とへり、（十一）とさらハ別當たりぬ時  
乃堪思ふ、（十二）督總領と云領所を別子嫡流了傳え  
志あり、（十三）あは後嵯峨院乃長講堂領を後深草院乃御  
流了傳さ、（十四）執から、（十五）と符を合さく、（十六）不み計とあり  
督總領とハ家督總領乃上下罷さ、（十七）おろ、（十八）德宗と  
小書たるあり、（十九）是ハ宗家乃徳宗と云を罷さ、（二十）あり、（二十一）その  
領所ハ若狭國の守護職駿河國入江守等を云、（二十二）高時亡  
ひく、（二十三）め、（二十四）ち、（二十五）ハ、（二十六）裏の、（二十七）供所、（二十八）所、（二十九）り、（三十）り、（三十一）置、（三十二）ま、（三十三）と、（三十四）あり、  
去の、（三十五）時ハ、（三十六）成、（三十七）考、（三十八）乃、（三十九）幼、（四十）稚、（四十一）乃、（四十二）役、（四十三）ハ、（四十四）督、（四十五）總、（四十六）領、（四十七）を、（四十八）相、（四十九）傳、（五十）し、（五十一）泰

時乃遠慮を仰ぐへき小長勝入道圓喜お乃也一人  
榮花乃務らんとして幼主を輔佐する道を失ふひ九代  
相承乃繁思を槿花一朝乃露黄梁未熟乃夢と醒き  
責そとく誰の課きく九原乃苔のふみ泰時朝臣を  
見るへけんや

正和六年七月十日成壽九十に歳ふくく元服し従正位  
下叙し九馬権頭し任し相摸守基時不代く御後見不  
補きらふ基時乃泰時乃弟不相摸守重時の曾孫彈正少  
弼業時ぬ孫ぬく新別當時兼乃嫡男たり年高く思慮  
深かりぬは諸人安堵の思をありけふる急し職を止  
らせしと何事や聞きの身を塞ぎ見人眉をひそめ

六ノ三

冷笑せぬ人あそふるまじ也

義時ハ十二歳みく後入位下八に歳みく後正位  
位下叙し其子の泰時ハ二十に歳みく後入位下八  
十七歳みく正位下叙し其子乃時氏女八歳不  
て父不先たりく早世し嫡孫經時才一歳みく後入位  
下叙し其弟時頼十七歳みく後入位下廿五歳みく  
て正位下叙し其子時宗十に歳みく後入位下九  
馬権頭し其子貞時十に歳みく後入位下九馬権  
頭みかる時宗貞時乃先例みよつて高時より十に歳  
みく後入位下叙し九馬権頭し任きかろし時政



義時泰時ハ晩ク又位ヲ昇ルニ云トモ時改七十八歳  
義時六十二歳泰時六十歳の壽を保川時頼より其  
早く榮爵を賜ふると云トモ時頼廿七歳時宗廿二歳  
貞時に十一歳あり世を多く以父兄乃勢不席之義  
官と云ふハ人乃不幸なりと程伊川乃歎きくモ可  
おとろき理ハちいふ事不也

同六年二月之日改元あり文保元年と云左馬権頭高  
時相摸守了任を三月八日去書旅あり

東鑑 卷十 建久二年正月十八日甲子乃條ハ政所去書  
始を初ハる前ハ所家人恩深ハ俗を承の時或ハ所判を載  
ら也茲々奉書を用ひら致而了今羽林上將了備り

め給ハ乃同沙汰ありて彼状を不返一 家所下文ハ成  
改めら致趣き名を定められ 有ハ將家政所御下文ト云ハを  
政所別當前因幡守平朝長廣元令至計允後原朝長仍  
政案主藤井俊長 謙田新 知家事中原光家 采平ハ 有  
あ也録倉幕府少く去書始約と云 濫觸ト云へり  
後世乃書か也トモ成氏朝長年中仍事ハ所去書多分  
二日形り但日限不定関東御分國々を治せ也執事代  
を召具く政所出仕あり所判あを趣き物をば執事代  
持卷御親をば政所乃子息持く来ら致く時御判あり  
その後すく執事代系御判物を賜く致ト見ろふと思合  
せく去致へり



信光園



去書旅

鎌倉

御所

の

六ノ五

同二年二月廿六日京都入御讓位の事  
持明院乃任  
洞子遷御す由く太上天皇了あせせおく由以實業二十  
二世のハ新院と稱す奉る 持明院の仙洞了後伏見院乃  
以即新院の父帝おけりせり由外了後宇多院皇了後  
花園院とすあせあり東宮所任す即をらせ 冷泉萬里小  
路乃内裏了おとす御歳三十一後宇多院第二皇子  
子て後醍醐天皇乃所事ありあせは故相摸守貞時乃所  
任ハ後深草龜山西院乃所流みくかへ御 即を冷泉御  
治世乃十年のくと議らひ中きり故たり又後西園寺  
太政大臣 實業 乃所女藤原嬉子東宮乃所息所と聞えり  
をさく相摸守乃議らひみくは年四月從三位了七月

女御とか一明る元應元年八月三日中宮おとら勢入  
あせを愈く相摸守西園寺乃家を眞負他了殊あせは君  
も高時を心をさく勢入愈く慮し御す川り奔又  
當代ハ龜山院乃所孫みく後宇多院皇乃寵愛の皇子ハ  
おとす勢は後嵯峨院乃所遺詔乃みく去乃所流みく  
皇統を相續せし勢あ入愈く所事あり所理運子所を  
々れさく之宮を東宮おふりなるへき由を高時へ勅詔  
有けあり高時更み肯ハなら以後二条院皇子 邦良親王  
を東宮とか一なる 後醍醐天皇の高時を謝さへく  
邦良親王とすなるは後二条院第一乃皇子みく後宇  
多法皇の所孫ハあくら勢ら所母ハ冬儀宗親卿の

女宗子正安二年庚子歲誕生（乾元元年之歲不  
親王とあり勢あり徳治三年後二条院崩し勢あり  
時後宇多院を以て宮を所位了と云下り也と云相摸守  
貞時ゆづく東宮を所位入即ち奉へる中を強く奏聞  
中せしは後慮より但せらるるなり）  
へく（おりのたま  
五人根本あり）と云及以て宮を常盤井殿あり人為大覺寺  
乃所子供を以て勢らせたり永赤門院瑞子乃養  
教とあり勢らせり（瑞子ハ宗尊親王乃所女なり）  
元年後宇多院乃宮了入所子海直了院野鬚らせられ  
元徳元年八月廿九日御年五十八歳不崩所子なり  
す仁和寺乃木寺といふ事らるる海を以て色ハ木  
寺宮と云中々詩歌管絃乃道を好す勢ありいは

其道了携たふ人乃事らぬはかりけり一年関白致  
下頼阿法師かと付かて勢ありて勢花懐舊といふと云  
け宮ありて海を移ひける時了頼阿法師  
物ありひかりといはく花のいへり昔乃哀いさを深  
と詠きし由徳治乃末踐祚ありて海を意乃養り合めりふや  
かく打こ免らるるおと海を意乃養り合めりふや  
花園院沙印位ありて時了東宮了たてせ移入へりし  
を及後宇多法皇志ありて神宮（法皇才  
二皇子）を儲貳不定め  
らとて神宮へ所位乃後以て宮を春乃宮りあさせ移へ  
と約てら色し形りなりいは文保乃今不りり  
三月九日御元服ありて御名乃惟善と（或ハ惟良ナリ  
又ハ惟嘉ナリ）

後了那良と更めらるるに後醍醐天皇

伯父佐乃所中むひすく少なきは一宮尊良親

王 文保二 三宮尊邦親王 文保二 續くす由を

坊すの定め終るとお不しめされしは後宇多法皇

乃兼く定め並せらるる約と高時を拒みたまは故

了東宮より之を終ひて終る主上御歳をくく二十

餘ら所か内より仁意乃聖恩深くに海了及みされ

あをを思食也外より文武乃善政遠くふ合了施され

多終し前代幼稚しく残存すゆけし時ふたふ

志りは鎌倉乃奉り頭人目を例め西六波羅にふせき

こふ思ひたり元弘乃亂乃志り乃からん元亨元年十

二月九日後宇多法皇大納言後原定房を所使し

ましく仁洞より方撥乃政務を聖旨ありつと比群臣乃

奏後及く比ま控は薰修乃善政を妨ぐること慮慮

不獲らあはれ向後一向より主上の御計ひを承へ

高時へ御遣はされはあはれより主上記録所へ出

ありく万民乃愁訴を聞食せけり出くは法皇暱

乃云卿ら急し時を失ひて窮猿乃林より起るる如く今

止拜趨乃百僚は蛟龍乃雲雨を得く終るる如く

東宮乃所せり成かなさりとゆと憑るる系らるる前大

納言後原經継郷中納言源有忠郷右衛門督教定郷左

衛門佐後顯等朝く九代侯志りけり正中元年後

多法皇崩御の後主上東宮を廢し親らまを登さるるを  
 思食たせり進けかろ高時東宮不廢しを多く御  
 失おとゆさ人々勅定を違ふを夕け進ハ高時を亡  
 不さるやと類し殿慮をめぐらされり嘉暦元年之  
 月廿日乙丑東宮薨せ勢移ハハハ殘祚程遠くハと待  
 福ハせ人々身俄し心殺し出家遁世を致さるる之十  
 餘人とかや松敏大納言基嗣卿乃三男了乘基と云人  
 あり幼稚より東宮に伺候せり行事あり後ハ西ハ  
 乃梅尾了引翁に御菩提乃大光了寫經しありと云  
 時より十八歳と云其真蹟の華嚴今猶梅尾石水院に現  
 存す

三部華嚴經跋

梅尾石水院藏

嘉暦才了曆黃鐘下旬に復前坊の河  
 芸撰奉書寫し時也繩床樹下清嵐  
 冷石水院前白雪深

家孝十歲

七子首侍青宮新宴賦詩等

々志抄西山隱居菴室の内菩提奉書

写代典懐舊忠孝嘉波取抄之  
奉轉後(必)多(て)有(水)四(向)

七年乃昔とは元應二年を云乘基の時十二歳あり  
東宮の新宴を侍り詩歌を獻すと云ハ風惠あり  
糸へ繩床樹を柵尾ひりあり明慧上人乃坐禅さら  
也一松樹なり石水院ハ繩床樹より蕪乃方りあり建  
保乃末了結構せりまはるる六百年の星霜を經る今不  
全く傳り也子靈場なり乘基のちハ仁和寺に傳り功德  
院法印乘基といひ是なり

元應二年八月廿四日都乃守護と云六波羅の北方に在  
けり越後守時敦のりまの地乃ち地と云寺臥けるは終  
り暮あく見かしく約年四十と云其後ハ南方に在ける陸  
奥守維貞一人し事執りいし何事を也思出ける  
元亨元年七月三日俄に鎌倉へ下向せし高時比し  
賞額小かりしハ同日に五日鎌倉を去りし上洛と云  
高時比し十九歳あり強く成敗し意あるふあるは但是  
長崎入道圓喜をよみ秋田城介時顯等より互に權を争して  
ぶれるからし同年十一月常盤駿河守範貞を以て時敦の  
代りしと云上洛せしめ北方に居し  
範貞ハ義時乃之男極樂寺入道觀覺相模守重時  
朝長乃事なり  
男を塩田駿河守義政と云信濃國鹽田を領しつと云ハ

鳥羽僧正畫鬪天 柵尾山藏

鳥羽僧正  
覺猷ハ保延

六年九月十五日  
八十八歳  
入滅すれハ天  
保元廣より七  
百二年前了  
あくる  
相摸入逸の  
弄ひ一闘大  
やゝ類や  
大人の態  
あゝぬを笑  
あるはたれ  
了柳出



六ノ上



紙 堅 一 尺 四 分

接縫高山寺の印  
上下入二川捺

今 五 九



義政乃長子を備前守時範と云時範乃嫡男と云云  
範貞あり鎌倉乃常盤了住しけし世人の常盤殿と称  
せり

高時まゝ北条英時を以て筑紫乃探題として筑前國了  
まゝ下博多居九列乃成敗を掌たりしは長  
崎入道圓喜の年久しく高時の家事を專ふしく私欲を  
恣せずと誰いんと云く高時乃取し入るの圓喜の職  
を停めて二郎左衛門尉高資を内管領に補て高資まゝ  
奢侈不長し國家を治むる道を志す以編り己の心を任  
せり振舞けしハ万民ハ愁訴を述るる便なく外欺乃然  
士ハ常不恨を念み憤を懐き同さぬる事と思ふ

人出せりけり高時年ややく弱冠了及くた日  
酒宴遊興を事し儉約を以九代乃榮華を習く  
姓乃艱難を以て或時大乃を以て闘入を以て興ある  
事おしめしは則法に相ふれ或ハ正税官物募  
りて犬を尋ね或は推門高家子仰き是を求めける間  
由く乃守備國司系く乃一族大名十七女之飼之鎌倉  
へ引進以路次ありて人馬下里驛路ありハ農民  
まゝあり分ちて鎌倉ありハ月十二夜大会を乃日  
定め一門内外欺乃人堂上堂下座をつねく見  
物も人あり人ありおしめしは其頃都子  
田樂を弄人として高時まゝ新座奉定の回

樂をうひ下し日次朝暮おれり着る賞冠乃あり  
回法師を一人引く大なる裸きく教をのまをける  
間まけり芳りといふに金銀珠玉をたくゆり後  
羅錦繡を粧ひ驕奢淫分不超過きり  
高時元弘三年三十一歳入る自殺せり  
回樂乃を兄を定り孫と嘉保二年國白教乃  
母儀の願立芸條子芝田樂といふと永長元年の  
夏洛陽より田樂乃を引く云郷教上人よりお世を弄  
る愈教より大江匡房郷乃記ふんたり高時より  
二百に六十年系不代を興と教をくく水家人  
もありしあり

或一献乃ありける田樂とゆり栲子をかつ雅と教  
をさけり天王寺乃やよりれりを見とやと我とやける  
と障子乃ひまより見教を回樂とゆり見とるハ吳類長  
乃妖物みくはく鉤と翅生一人も人みくはくけり  
とかや後日南家の儒者刑部少輔仲範  
を南家と云武智九十四代大學政孝範乃長子後三任  
経範卿乃二男刑部卿明範卿の初の名を仲範と云  
回く天王寺より天下の勳勳出来て必死敗亡を命  
前兆ありと云ける果しと思合をる世と成りけり  
高時ゆり不政通り人を利ひを長勝高資より驕子長  
志賄賂りふけりかは陸奥國の津輕乃任人安東光景と  
多一族季長と鎌倉子新伝と有ける高資了篤

賄ふく下邳を待ける高資両方より過分乃財寶を  
たかりしりく理非乃決死徒子日をまね月を越しふり  
西人新征子退屈し津控し御り一味與力乃去としと振  
集め合戦し及入高時兵をつりて是を討平けん寸と  
し金とも安東の勢つりく勝てあつた人

承久乃むりい一院乃睿慮しりく又畿内丹波丹後紀  
伊但馬伊賀伊勢伊濃尾張近江十国乃兵共り馳集  
て北条義時を討亡さんとせしたり東海東北陸奥の  
勇士十九万余務にか心を一ひりしり上洛しりい十四  
國乃兵士一日もあらざる敗走し頭をのちく軍門子降  
し轍魚乃命を惜むりためり万代乃慚を忘れた教たい

かみと云ふ昔日本國乃兵士三年乃大番とく京より  
せしる歸る時りい力盡く歩蹴りく下向し教を右大拍  
頼朝卿乃哀れしせ給ひ六月乃りりめて各々分限乃  
榮耀を樂しゆせらるし思を思入る故りり元亨乃今  
ハ其分限乃榮耀を奪ひく樂しゆせらる其安供を勞せ  
志失く苦を去りて教ハ何ぞや安東ハせ勢る大名子非  
と云とゆて後鎌倉の下邳を背きりり海内及覆  
乃北をかいて秦乃亡んとせり時り陳勝を成卒の賤  
きふ起りく漢高乃嗚矢と成り似り  
正中央元年秋乃頃主上後醍醐北條家を亡りり公家一統  
乃政を致せんしり近侍乃云卿子作合されけるといはる

あつり漏ちりらん高時を平入しは白野中納言資朝卿  
義人頭後基朝長を九月廿二日鎌倉へ呼ばり入巻院の志保  
を紀さんとせり不問女に日中納言宣房卿勅使とて強倉  
へ下向ありて宸翰乃撰書をよきせけり高時去の時年  
廿二何事乃深き慮ゆふく萬事ハ長崎高資り計らひし  
誓書を及秋田城介不請取を則ち書を披らんとせりを二階堂  
出羽守貞藤かく練く封のより勅使了返し進らひへき世  
とせり

二階堂貞藤ハ大猷冠鎌足云乃孫尤大長武智麻呂の四男  
冬儀治致卿乙磨八代遠江権守為憲ハ代後河守維  
遠也也二階堂家乃祀たり維遠ハ代出羽守行藤ハ遠

て道我と云則貞藤乃父なり貞藤正應元年戊子乃歳  
鎌倉みく生る母ハ平賀左衛門尉惟時女貞藤才學を以  
て世子賞せらる檢非違使了補し出羽守を兼正申三  
年高時と共く薙髪し出羽入道道蘊と云時ハ廿九  
歳言時了長を承と十六歳よりとて大に匡救乃力を盡  
せと云と由大履の類れんととて一本乃支ふる如しあり  
孫ハ吉野合剛云乃討つる向ハ大塔を高くせり穴あ  
たりし不元弘恢復乃時宥怒を蒙りり本領を安堵し  
たりし謀教り座きりりく殊せらるり約年に十六  
歳長男兼藤尤衛門尉ハ城守たり次男知藤尤衛門尉之  
男兼義亦泉守に男仍遠尤衛門尉ハ子孫あり

長崎高資を討ててある封を削ぎて拜見せしむと云  
然る小遂子拜披せんと不定まりて齋藤利行あまを後  
りけるる叡心儲さる紀天乃照覽子何とと托を所と一  
子重く忽々問絶しと駭し血を吐くけし高時大不恐  
朝廷乃御事武家いふいふあへさふあふと復奏しと勅  
使の上源せしをよ入かしく資朝卿をば先渡國へ移して  
本間館を押移後兼相長をば京へ還しけり同二年の  
春高時大に歳重病をましく執権を辭し二月十三日薨  
あく法衣崇鑑と云長崎日頃金澤修理大進貞顯と親しく  
せしより貞顯を以て執権とふ以時高時の弟泰家の  
孫と云先高時より代りて執権とるべきもの我ありていと

思ひ居りし不し世を憤りおかしと出家入を法衣ハ  
慧性幼年女歳と云  
泰家小字は口郎高時岡母弟と云初名ハ時利尤近衛將監  
不任と云弘二年名越高家久我斃り討死し足利高氏官軍  
子ありぬと聞え時武元と号す六國の軍兵を借使し人  
を大將ふてと落せしんとせし新田義貞武元國へ打て出  
去るハ先新田を討てて後子足利を討るへと泰家入  
道武元好く新田と合戦しけふのハハ泰家打勝と云  
とハ終子打負く泰家鎌倉へ逃返すハ義貞續く責寄  
りく乃今戦利かく高時葛西谷へ落けしハ泰家ハ打たふ  
奥引へ落しちふと落しと西園寺公宗乃家不仕り刑



部少輔時興と名字を改め北條家を興さんとして謀  
 事あり何事ありとて建武二年に宗誅せりといひ時興  
 信云  
 信云  
 泰家乃執権を得ざるを怒り出家せりハた執権乃富と  
 泰家を執権に奪はれ乃其人とすを考へる義貞を武蔵子  
 の掌を返すに志す志願王遊女を陣中子迎へて脱亡  
 せしと云ふ事遂に成り前驅し鎌倉に入り鎌倉不  
 去ハ時興を不徳なりと云ふ共死を以て漸次景家依  
 入を公家とす興は公家の刑せられ死を惜むのそ是富貴不  
 去を以て公家とす興は公家の刑せられ死を惜むのそ是富貴不  
 出長く教ふ時を時興は公家の刑せられ死を惜むのそ是富貴不  
 高時入道病愈へ去を以て大に怒り貞顯を殺さんとい  
 貞顯おぼしきとて金澤より引籠り出仕を止め四月廿四日  
 赤橋守時を以て御後見とて大佛陸奥守維貞を以て水

判となさむとて入道と憤まき去りて解たり去りハ貞顯  
 四月廿六日出家と法名宗顯  
 金澤修理大夫貞顯と北條義時の六男龜谷五郎實泰  
 乃長子越後守實時乃曾孫なり父を越後守顯時と云  
 實泰の母ハ六浦某女とて家謙倉乃龜谷子ありけりハ  
 義時之後とて龜谷禪尼と云實泰ハ淵名興一の女  
 を娶り實時を生じ實時とて其母乃所領か否  
 金澤より住せりハ世より金澤乃越後守と稱せりけり  
 文永六年父實泰ら七回忌ありて一字乃真云律院  
 を草創し金澤山称衣寺弥勒院と号し入宋沙弥圓種  
 等と共に魔を除く怨を除くんことを修めりて菩提を證

果く建治二年十月廿三日あふく率きらせり即称  
名寺正慧と云實時北條相摸守政村乃女を娶已太郎  
實村に即顯時を生む實村早世しけし八顯時を以て  
家督とし實時學を好む參河守清原教隆を師とす  
群書治要を受

群書治要卷第十四末記 清原教隆真蹟

建長十七曆大獲十三日

蒙洒掃少尹の旨殿命加點了

慶長守清原氏

六十九

實時曆仁元年二月十八日掃部助宜陽門院藏人小佐  
主敦中評定傳ふ見托東澄曆仁元年二月乃條小侍  
同年六月の條に陸奥掃部助實時とあり宜陽門院と  
ハ後向河院皇女觀子内親王乃湯軒の文治八年准  
勅長四年六月七十二歳不崩御あり實時去乃歳  
十八歳不崩御建長七年乃三十二歳也掃部助の之を  
洒掃少尹と云教隆勲人ハ文永二年七月十八日就小  
教隆乃清家明經乃儒者ふく録食了來り幕府小侯  
廿一と東澄子見ろく且河色及實時もあゆみ後ひく學  
を受し正編か實時建治元年ハ八十二歳あり評定  
衆一番引付頭たりし又月病了依く六浦別業子引  
籍上六月乃頃ハ羣書治要乃點を寫しかとと與



建治元年六月二日以勾勘本書  
寫點校終切柝此書一部事以年  
後藤壹州為大番在洛之日予  
依合誌所事寫下之白於當卷  
者從藤三品前範之平之如結

早夏七文永七年極月回祿成  
孽化所燼平今本若矣上以  
前以三本勾勘之年寫之問意  
又以件本重令書寫者之

越州刺史平卿

書子思之々里勾勘之ハ勘解由乃唐名亦里問注所執

事勘解由判官之善康有を云大田氏部大輔康連の子  
日勘解由判官了任を時了母八歳後長寺列ハ壹岐守  
と云え建治元年ハ四十八歳なり  
基改を云郷の野藤之品茂範ハ文章博士式部大  
輔經範乃長男文章博士侍讀み南家乃儒流なり  
去乃跋をうく實時乃學を好すく一を知へき也  
實時の妻ハ無外如大禅尼と云知名子代野姫秋田  
城介基乃女乃城介泰盛の女如大禅尼乃傳不見  
盛ハ寛喜三年ふ出る禪尼乃父義影の女とせんハ禪尼  
父乃たらん出らハ泰盛乃父義影の女とせんハ禪尼  
の生るとく建治二年十月廿三日實時ふ後也てハ  
義影十四歳心を祖闈子詢思を宗乘子寄一ハ弘安二年佛光禅  
師乃鎌倉へ来ふく會ハあ也を持くく尼とかハ時子

又十七歳を後上洛く緒永藏ふ冬祿一資壽精舎  
を捕えく專一く坐究一日井不執く水を汲けふ子  
慮らを水桶乃緇せんく水乃地了覆るを見く忽然  
くく大悟と新秋を誅くくく  
子代整うくくく冬桶乃底ぬけく水たく孫ハ月意  
を守めく佛光了見えく悟る也を望きくハ佛光  
法衣からひ子自贊乃頂相を付與きりる同九年佛光  
遷化了臨く手書を與く云汝日衣法を受く道風大  
子仍ち教老懷惟法を骨髮少一許里を分く汝ハ留興  
以汝為子安奉くく別ハ小禅刹を置吾子代く化世  
よを命くく正子力を竭くく吾志子違入一とかれと

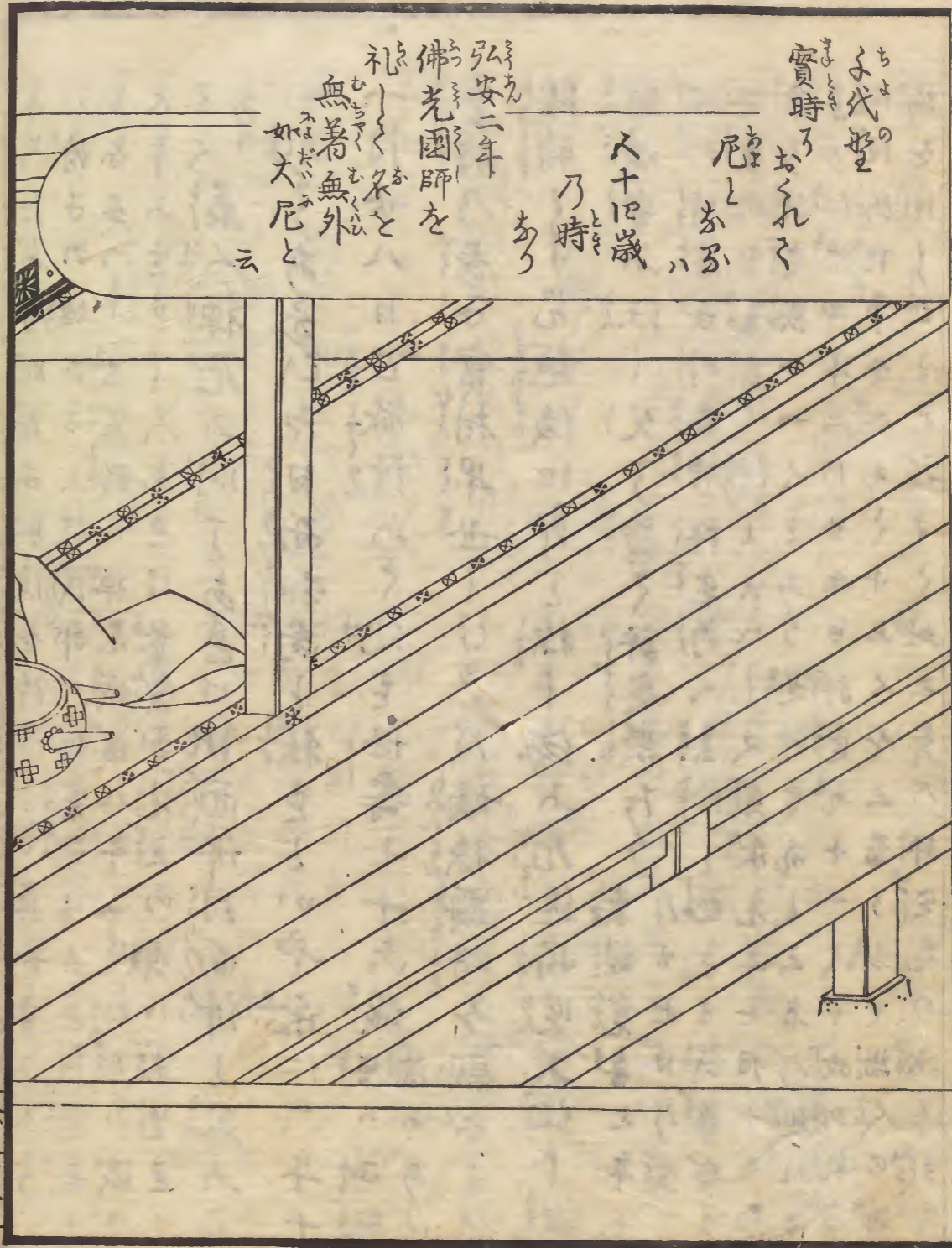
禪尼をふちり仁和寺の東北乃ひ色をト一々梵字を  
經營一萬年山正脈院と号し佛光乃塔所と以  
尼遷化乃後人十八年康永元年四月高武藏守  
らまをく真如寺と号し夢窓圓師を請し主たりし  
傳ふ記も師直出迎より前禪尼修北松の本島一宇を  
建立一景愛寺と云佛光圓師の答付一處といはば  
定利讚岐守貞氏乃北方實時乃女九年前不堂造とり考べし  
生あり一は上牧民於大捕二階堂山城守等力を全  
せく淨財を助とい登り信光云是利貞氏乃室ハ上牧  
益泉清子康永元年十二月廿二日逝去行年六十五歳  
又足利貞氏ハ女永十年お生る禪尼五十六歳乃時あり  
師直の母ハ清子の妹勸修寺別當官律入道通鬼の妻  
の姪ふは清子を師直母於大僧母ふ敬りし故に清

子乃ためり師直正脈院を修復し真如寺と名せり  
ハ清子の姪たる上牧民部大輔憲顯小お出城隨喜せ  
るおふへ一照憲顯ハ禪尼歳後八年お生師直ハ歳後  
八年お生色一人お色は景愛寺建之の頃ハお生色さ  
ふ人義人禪尼お向てあはし日面佛月面佛と答ふ  
かおるあふひ日面和尚と称ととかや永仁六年十  
一月廿八日正脈院お化と世壽七十六歳塔ハ正脈  
實時乃長子實村早世しけはは嫡孫顯時を嗣子とし  
顯時と一光越後日郎と称し後小允近將監入任し又  
越後守お任し父了譽と評定衆たり東鑑寛喜三年十  
相外時房武別泰時評定所へ給と記さる幕府了  
評定所を置せし證と云へ又貞永元年七月十日の  
衆評定衆十一人とあり是評定衆十一人乃起れる  
向仁治四年二月廿六日評定衆十一人乃起れる  
論を師直執事を加えと足控さく此三人を三番乃評定衆  
の次了人執事引附



圖様一遍上人繪ふる

信北編寫



子代聖  
實時まじしろ  
おくれろ

尾おと  
かふ

八十歳

乃時とき

あり

弘安二年

佛光國師を

礼らいし

無著むしやく無外むがい

如大尼にょだいにと云

社九人あり、引附の今乃目安了、似る音博士後隆真人  
 撰詳ふ幕府職掌考、みふの爰ふ墨以、音博士後隆真人  
 を師とて春秋左氏傳を受ら、せし中乃自序の末記  
 越後守顯時真蹟

弘安元年九月廿二日以音

博士後隆真人今平去真點校

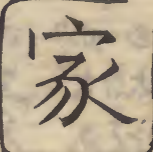
從後隆真人今平去真點校

後隆真人ハ教隆父祖乃遺書を更あり我集く、書籍  
 真人乃長野あり乃散佚かん、を患ひく土倉を造り、東大寺の倉不  
 滋野貞主乃慈恩菅家乃紅梅河家乃文庫善信の文庫  
 等々、金澤文庫と云、印を卷く、不躑々納めら、也、形折我  
 邦あり、藏書り、印を躑々ハ聖武皇帝乃天平十二年に  
 月二十二日戊寅以内家印、光明皇后、彌西家經三字之  
 上、西家經ハ光明皇乃御印、おれと、も謬與大氣躑印  
 書不可雜亂、野帝を云、聖武亦即、四字關、者見印下西家  
 之字應擬西家之書、故他別驗永為龜鏡と云、あく千而  
 に年前より、もや藏書印あり、と明り、西大、あくハ唐  
 觀の印を始、とて、數多し、顯時弘安八年十一月廿二日  
 爰了、野がけ、也、凡累也

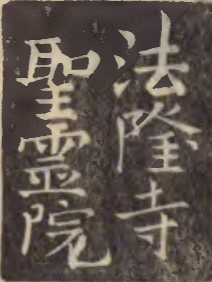
顯時藏書印

# 金澤文庫

承曆四年寫本心地觀經入蜀ところ  
後三条院長女  
聰子内親王藏書  
七百十四  
年前  
あり



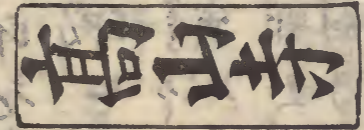
法隆寺覺印藏書印



天治年中覺印自筆  
の慈恩傳入蜀ところ  
古寫大集經入蜀  
印



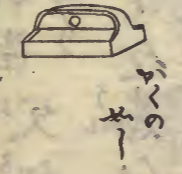
又一顆  
後鳥羽院所賜  
衣翰と云櫻木  
木  
上入真跡と云



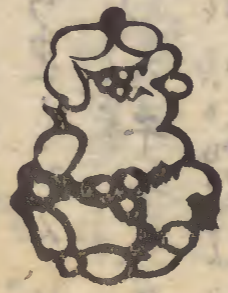
高天寺中林院藏印

# 高山寺

顯時より九十年許も  
あるさかり



延喜年中寫本  
四分律入白粉ふて  
彌たり



同工  
梅尾明慧上人  
持經  
の内  
あり

評定衆を辭さく六浦了籠居一正安三年三月廿八日  
け處了卒を以年四十八歳長子修理大夫貞顯次男大  
僧正顯辨兼宮別當たり三男ハ甘繩伊豫守顯實女子  
ハ足利讚岐守貞氏妻と系圖了見えく  
景愛寺の傳  
小尼の妻たる所云王位それハ貞顯乾元  
時代あつて顯時的女ふくハ相當と云へ  
貞顯乾元  
元年七月廿六日前上野介宗宣了代りく六波羅南方  
小居時中務大輔嘉元四年越後守了任を此頃右大  
輔之位經雄卿  
日野右少輔  
藏卿為長卿の外曾孫  
小後  
群書  
治要を受法曹類林を寫くすくハ九条の左衛門持佐光  
經朝長か親一りハ自筆乃末記あり延慶三  
年左馬持頭ふかき也正永元年武藏守をりけ同日

嘉元四年二月十九日  
以右大臣之位  
經雄  
以今事寫點授  
以此書祖父  
越前守  
被終一部  
切之  
慶後年  
少之  
終卷  
仍事加之

後五位上行  
越後守  
貞顯

嘉元四年二月廿一日  
重授合年

越後守  
貞顯

七月十一日相摸守  
巡時病了依之  
執權を辭す  
けし  
讚岐守基時  
執權不補  
貞顯が判  
す  
けし  
嘉曆  
元年  
至十二年  
の  
ま  
り  
す  
ふ  
泰家  
乃  
憤  
り  
就  
す  
に  
月廿六日  
薙髮  
し  
崇顯  
と  
云  
然  
る  
ふ  
元弘  
三年  
五月  
廿  
二日  
葛西谷  
東勝寺  
に  
於  
て  
自  
殺  
す  
けし  
高時  
乃  
心  
を  
取  
ん  
と  
我  
ゆ  
と  
薙  
髮  
し  
け  
し  
鎌倉  
中  
ハ  
大名  
小  
名  
も  
入  
道  
あ  
ら  
ぬ  
か  
う  
り  
け  
り  
か  
く  
長  
勝  
高  
資  
り

計らひみく赤橋相摸守盛時を執持く大佛修理主維  
貞を加判とあしけせと小人心の穩やうあきりき元徳二  
年高時入道高資ら威權並ひあきを忌く長勝右兵衛尉  
高頼高資を竊に討く捨よと語らひけふ事露せし  
かた罪を高頼不課き陸奥國へ流し遣せ高頼ハ高  
頼の叔父  
後高資まむい逃れし高時入道あせとゆきぬ元弘  
元年後醍醐天皇鎌倉を討ちやと思食たしぬハ大塔  
乃宮尊雲法親王叡慮をたしけ糸らき迎困乃武士共  
へ令旨をふき有驗乃高僧へ調伏乃修法を仰付らき  
ハ中鎌倉へ関えけハ法勝寺の圓觀小野乃文觀僧正  
浄土寺乃志圓僧正を捕えて遠處へ遷し右少辨後基朝

臣を鎌倉に迎えくあせを殺しきくハふと備と諸將乃  
異見を問んとせし高資無子先くち主上を遠島へ遷し  
大塔宮を炸昵迫乃云郷教上人を殺さしと言葉を放し  
憚る色ゆかけ不議らひけハ大小名にを箱く互に面を見  
合せ居りし二階堂貞藤諫く云く君君たるまとい魚共  
臣ゆつと臣たるまハ有へまると云奉文あり隱謀阿順乃  
卿相西三人まき不追捕せし何乃恐怖候へき他慎  
臣たか道を盡さぬあハ君中定めく君下ハさせぬへき  
ありと申けるを高資きく由あき文武乃用緩急勢ハ異  
ハ孔子の道今日云へき處にあり君臣乃道を守らば  
子を束縛し戮し殺し乃早く承久の故事不後入へしと

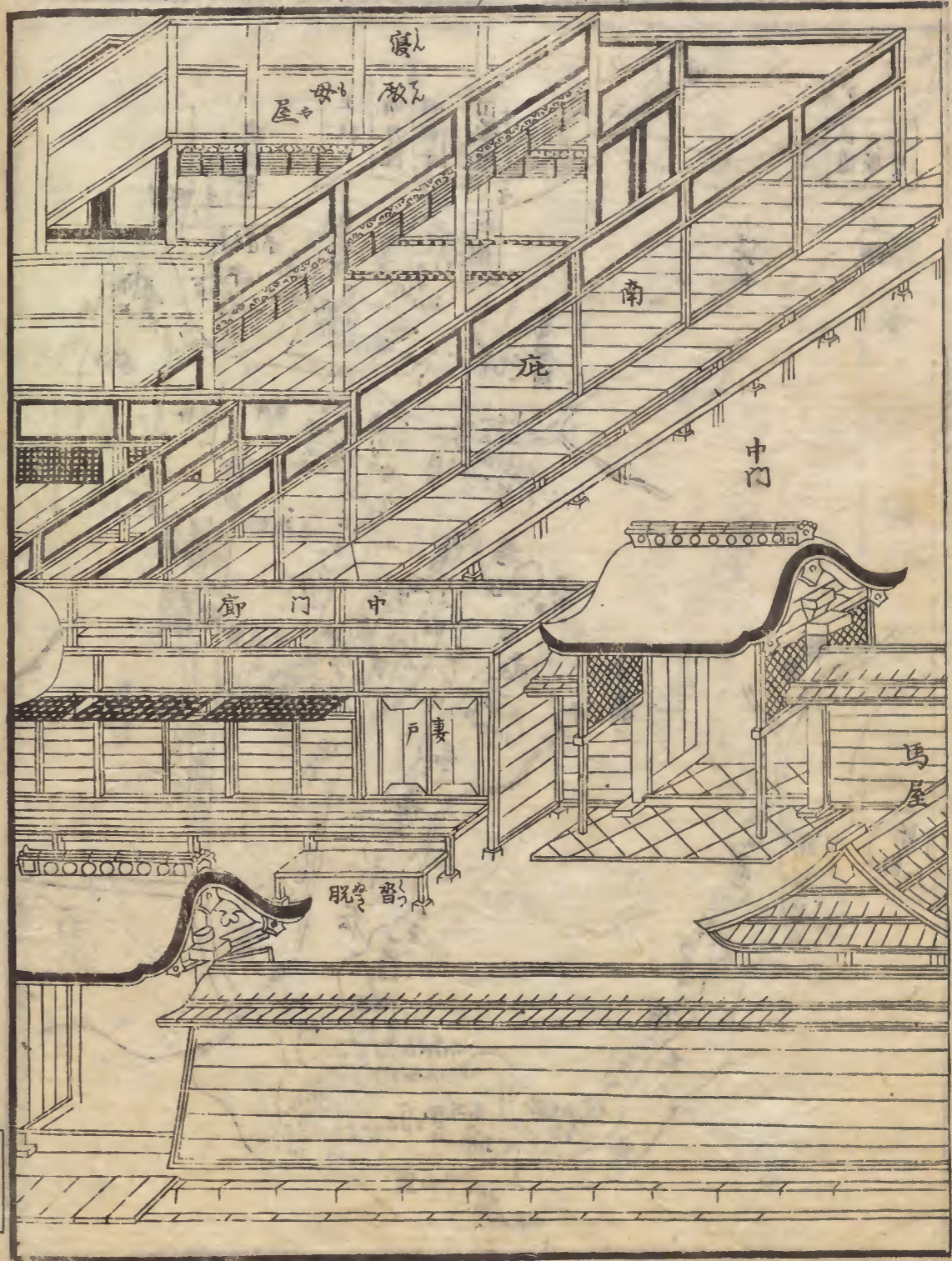
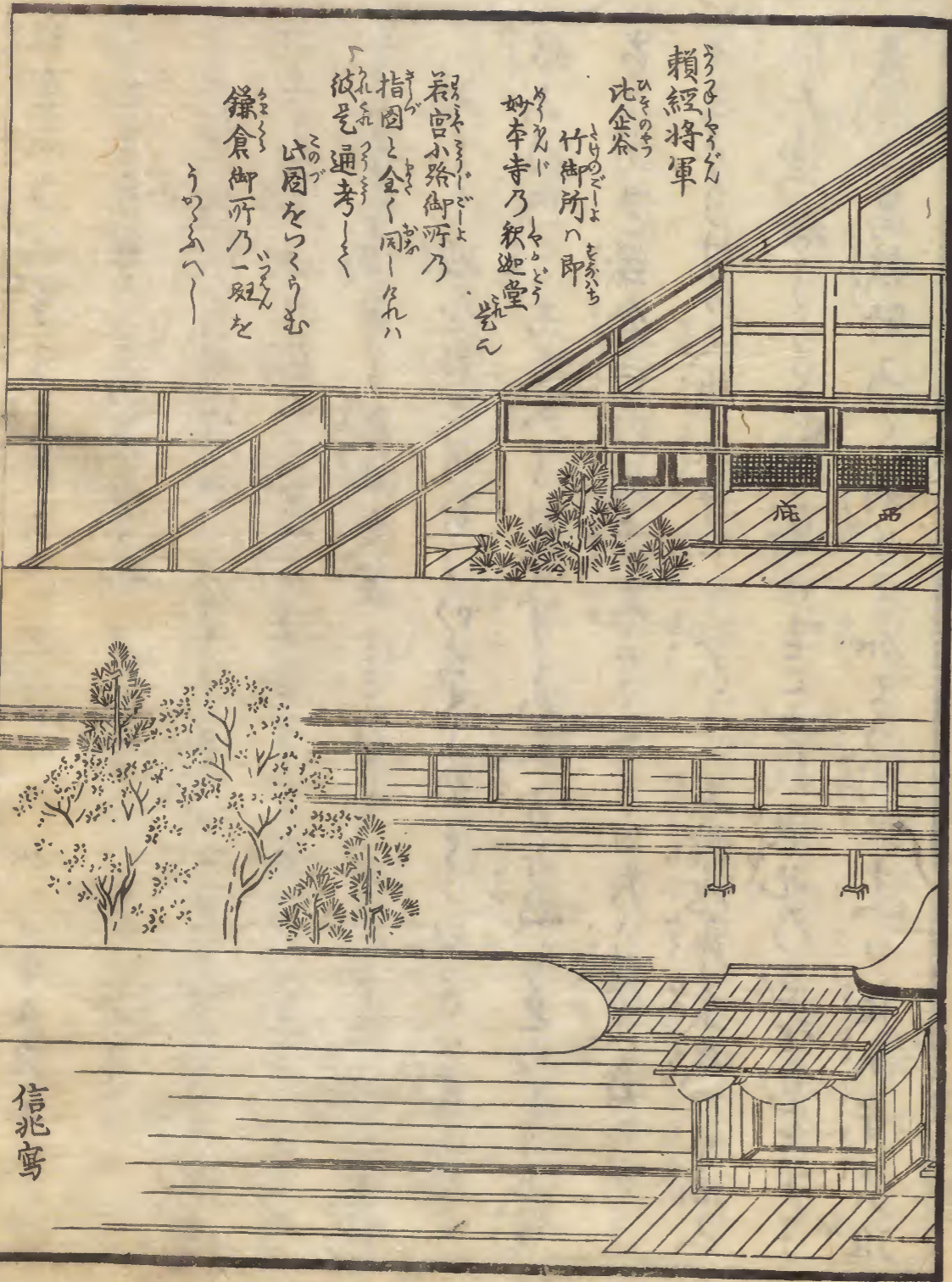


展長高よりありて執りけし高時の道中儀子同して二階  
堂貞藤城越後書を使て上洛せしめけるを如何し  
かハ同食らん大塔宮あを和食く主上を竊り共なる  
色も色ハ主上ハ並置へ遷幸ありて宮ハ吉野へ移らる給  
けふ官軍利ありて主上隠岐乃島へ遷幸す海に北  
極より大塔宮をよみ楠北畠赤松和以下乃官軍あり  
あふ義兵を揚たりけふる天運循環し天道盈を闕ためし  
ふく國々小與力の旗を立し不とよ北條一家の好篤りける  
足利治部大輔尊氏鎌倉を出て官軍に馳加たり六波羅を  
攻ると早馬志き波をうけ共ありきより國々國ハ云  
ふ及む陸奥出陣乃兵士を催促ありて上洛せしめ六波羅

小力を合きんとせし新田小太郎義貞上野國ふく義兵  
を擧ぐ武藏國へ打越る中河原の先迎國の叛逆人を  
あふ誅めくおちふ京都を救たりしとく金澤貞將を大  
將とて上総下総乃軍兵とゆき下河原へ打て出て敵乃  
後をたち切へし櫻田貞國長崎高重ハ武務相摸乃軍兵  
を討て大手小向へ合戦を致しと定めけるふ櫻田長崎  
武藏野合戦し打負ぬと闘て高時入道大に驚き口郎允迎  
大丈入道慧性を大将とて十萬餘騎を武藏國小差下以慧  
性分陪の軍ふ打勝と云とゆ分陪川原乃戦ふ打負て鎌倉  
へ引返すも後義貞東國乃軍兵六十萬七千餘騎を率て  
後守片瀬腰越し門に十餘ヶ所ふ火をりけと方より責入



鎌倉古圖 大町関氏藏





おと同一く自害あつく失け色ハ高時入道由腹より給ひぬ  
年之十一とくあそ一族門葉八百七十餘人おかく枕ふ自害  
あつく星霜百二十餘年乃恩徳を冥土黄泉乃下ふ報おけ  
也はそれらう所後まゆるく六子餘人き遠へ所ち久頼乃中  
へ抱入く焼燭色てそ失子らる元弘三年五月廿二日ハかる  
日あ色は此のと鎌倉扱とく諸人の見聞を驚らせし鳥帽  
子乃ためお神の綺羅まゆる一瞬若炬火と立のり頼經  
頼嗣兩將軍をくめ宗尊惟康久明守邦乃に親王乃所所時  
政義時泰時時氏経時時頼時宗貞時高時九代乃繁栄大  
ちまらふ不灰燼とあけける扱あをれ墓あを世の扱まう  
鎌倉小町乃北茶宮小路乃東ふ金龍公實戒寺と云圓頼

教觀乃林苑新あつとをかたら東鑑子に同義時乃大倉の亭  
と云け地あり時政もそりあい爰ふ住けるり又東鑑脱漏了元  
仁二年十月十九日相列此條時房武列泰時卷會せあ給  
將軍所乃所地の事涉沙あり相人淨法所ゆ云右大  
将家法華堂の下乃所所の地は非相應の地あり何そ他  
所う移さふへんや頼朝屋敷と珍鑿法眼云法華堂下  
乃所地殆るへく寸西方の岳とる衣幕下乃所廟あり其  
親の墓言くあつく其下り辰時ハ子孫と色と色中本父不見  
ろく幕下の所子孫涉屋以息符金せむるる茶宮大路  
ハ西ふ大道あり東ふ川ありあり北ふ鶴岡南ふ海水城  
港ろくろく多奴の勝地と云へ一依く爰ふ法定と有く

嘉禎二年三月十四日若宮大路の東に御所を立らむに  
月二日本儀の始に八月に日御後徳と云ひ地あり然る  
時右大将頼朝卿治承四年十月九日大庭平景義を  
奉りて知家事兼道り山内の宅を後しゆらむに十二  
月十二日御後徳ありて大倉乃御所と云ひ今乃頼朝屋  
敷あり右大臣實朝云々之代に十餘年住を移りて  
舊蹟あり 大庭景義の武家御心事 建武二年三月廿八日  
奉りて遷賜と云ひ一  
足利冬儀尊氏卿後醍醐天皇へ奏聞し葛西谷東勝  
寺乃焼ゆり累々たか北条一家の骸骨を改葬し法勝寺  
の圓觀僧正を以て導師として一寺を建立し相摸國全  
日卿半分の寄て香積の資も元高時入道と徳宗推現

と齋志の九原乃扶骨荊蕪を根りは突る顔を起し中有  
乃迷魂勅勅乃愁眉を和光乃歎不問り利生乃威力日々  
子新り永く此地乃鎮守と云ひ之聚浄戒乃慈眼をめぐ  
らし移りし也  
武家評林系圖より高時領銀二十八万七千貫當代知行あり  
て百四十万石不富ると見ゆるハ當代の五石を貫  
と積里より好りたり高時乃領銀駿河國入江庄と若狭國  
守護職といふ本記を見えく之とも其餘ハ詳らあり以  
さ之ハ廿八万七千貫と云ひ行り依りてゆるみや疑念  
今考ふるに際田租元一段之百六十歩不錢之百文を以て  
通價といふ 但高下まちくありて一貫文ハ一段百十  
難し依りて平均して通價といふ 然し一貫文ハ一段百十

歩許乃田地了高八万七千貫八万九千又千所許  
當之八駿河國田九千七百九十七町若狹國之千百二十九町  
と拾芥抄子見くるふくハ狩八万二千餘町たり

先進繡像玉石雜誌卷第六終

